

自信喪失のドイツ

研究開発室
鈴木 征男

< 低成長率と高失業率 >

2002年1月からEU（ヨーロッパ連合）の統一通貨であるユーロが流通を開始した。通貨統合圏の中核はドイツとフランスであることはいうまでもない。しかし、ドイツの経済的パフォーマンスの悪さが目につく。図表1は各国の経済成長率と失業率を表したもののだが、2000年、01年と米、英、仏国に劣った成長率であるし、失業率ではフランスを上回ってしまった。図表中の5カ国の中では最下位である。アメリカもイギリスも90年代よりも失業率は改善しているが、ドイツはほとんど改善していない。

< 低下する国際競争力 >

スイスのビジネススクールの経営開発国際研究所（IMD：International Institute for Management Development）では毎年「国際競争力」を調査している。これは、経済規模、技術開発力、教育水準など多くの指標を合成してその国の競争力を算出している。対象とする国は徐々に増えているが、現在49カ国に達している。図表2は時系列の結果を図示しているが、この指標でドイツを見ると、1992年の時点では日本に次いで第2位だったものが2002年には15位まで転落した。

ドイツが抱えている問題は多い。消費や設備投資といった内需が低迷しており、失業問題は先に見たとおり高止まりしている。特に、東西ドイツ統合に伴い、一時建設ブームが起きたが、今はそのバブルの後遺症に悩んでいるという。旧東ドイツ地区での失業率は2001年では17.5%と西ドイツ

地区を10%も上回っている（ホームページ <http://www.euroassist.de/germany/unemployment.htm> より2002年9月6日収載）。

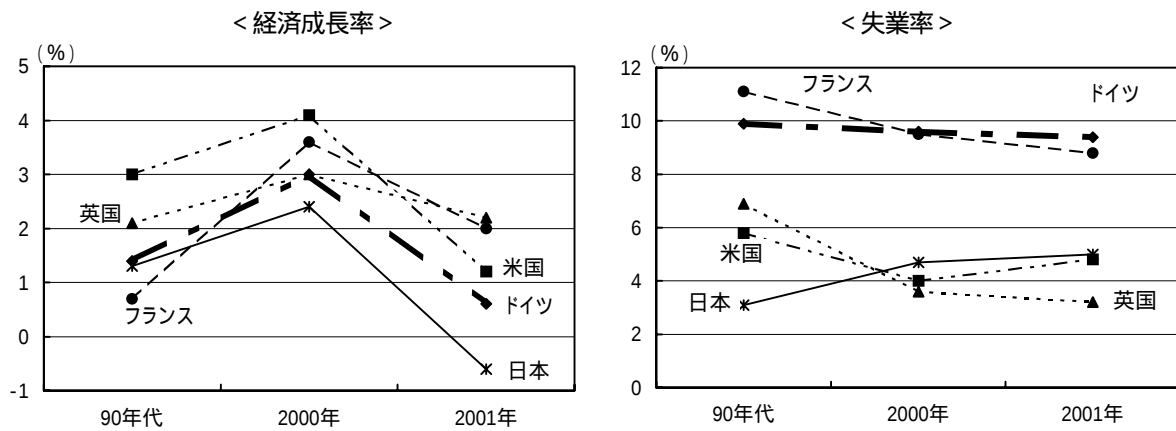
< 自信を失う国民 >

このような経済面での停滞からか、ドイツ国民の自信が揺らいでいるように思われる。図表3は「労働条件が悪い方に向かっているか」という質問に対しての回答の割合を示したものであるが、日本以上にその割合が高く、77.7%を占めている。失業率の低いイギリス（26.9%）を50ポイントも上回っている。さらに、「10年後自国は今より良くなっているか」という質問に対して、肯定する割合はわずか28.8%と日本よりその割合が低く、アメリカとはおよそ40ポイントも差をつけられている。

ドイツは確かに苦しんでいる。同じように、あるいはそれ以上に我が国も厳しい状況であることは間違いない。我が国は国際競争力では1992年には第1位であったものが2002年にはなんと30位にまで後退している。経済成長率でも2001年はマイナスに転落しているのである。失業率でもドイツ、フランスほどではないにしてもイギリス、アメリカを上回ってしまっている。

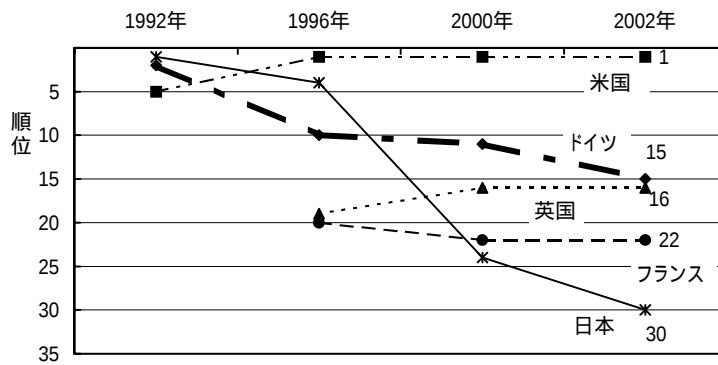
ドイツと日本は敗戦国でありながら、戦後急速な経済発展を遂げてきた。しかも技術力も高かった。しかし、現在はその経済で苦しんでいるのも両国共通である。我が国では小泉首相が構造改革を進めているが、ドイツでも9月22日の総選挙でシュレーダー首相の社会民主党と連立与党の緑の党がかるうじて勝利した。しかし、その政権の基盤は弱いといわれており、野党の首相候補だったシュトイバー氏は、この政権は短命に終わるだろうと言っている。このような中で、果たしてどちらが先にこの停滞を乗り切るのだろうか。

図表1 各国の経済成長率(GDP)と失業率



注：日本の経済成長率は内閣府「国民経済統計年報」、日本の失業率は総務省「労働力調査年報」。90年代は筆者算出
資料：内閣府「2002年春世界経済の潮流」

図表2 各国の国際競争力の順位

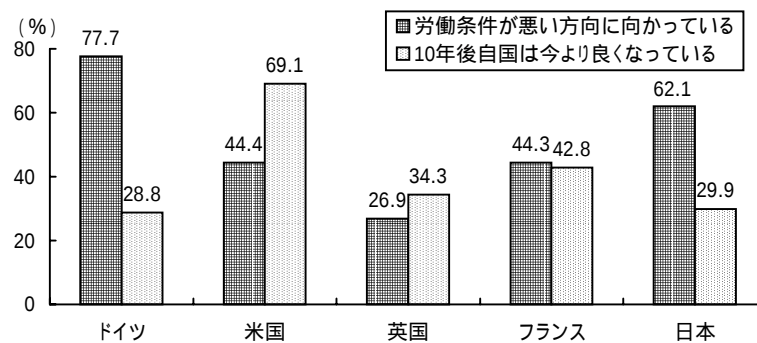


注：1992年は10位までの掲載

資料：IMD、http://www.mof.go.jp/singikai/sangyokanze/tosin/sk1406mt_37.pdf より2002年9月9日収載

WATCHING

図表3 労働条件の見通しと自国の10年後の評価



注：各国とも18～69歳の男女個人に対する調査。サンプル数は674～736人。調査時期は2001年10月～11月

資料：電通総研「第6回価値観国際比較調査」